

統一後のドイツとこれからの世界

木下 康光

時代の焦点のひとつである統一後のドイツについてなにか書いて貰えないか、という編集部からの御注文である。学内にほかにもっと適当な方がおられようし、それにこの問題については新聞・雑誌・テレビ等いろんなところすでに多くのことが語られてきており、筆者個人として屋上屋を架すことにならぬような独創的見解を有するわけでもない。いささか気がひけるのはあるが、翻つて思うに、これまで曲がりなりにもドイツの言葉と文化に携つてきた者のひとりとして、ドイツ統一という歴史的出来事について求めに応じて自分なりの考えを述べることは回避できぬ義務とも思われ、それで、かなりの部分が二番煎じ三番煎じになることを承知の上で感想めいたことを書かせていただく、責めをふさぎたいと思う。(このような原稿を依

頼されて初めて、『同志社時報』という誌名の意味に気がついた。)

東欧革命と呼ばれる大きな歴史のうねりの中で、一九八九年十一月九日のあの壁の崩壊から翌年十月三日の統一に至るまでのドラマチックな展開は今なお我々の記憶に新しいが、統一が達成されて東西の同胞が抱擁し合う一時の感激が去り、夢であったものが日常の現実となった今、甘美な夢から醒めたあとのほろ苦い気分、失業や増税といったシビアな現実を前にしての幻滅感が、とりわけ旧東独市民の間に徐々に広がりつつあるようだ。最近『シュピーゲル』誌(七月二十二日号)に載ったアンケート調査(六月から七月にかけて東と西で同時に実施)によると、「再統一しなかった方がよかった」と今思っている旧東独市民はどれ

くらいいると思いますか」という質問に対して旧東独市民の回答結果は、「殆ど全部」一%、「大多数」八%、「かなり多数」四〇%、「ごく少数」四六%、「殆ど誰も」五%、であった。「かなり多数」がどの程度かはともかく、そう思っている人が四〇%もいるという事実は、彼らの間の失望の大きさと広がりを見せるに足るものであろう。「統一の経過はあなたの予想したとおりのものですか」という質問に対する回答結果——「予想したより良い」八%、「予想したより悪い」四九%、「予想したとおり」四一%——も先の回答を裏づけるものとなっている。予想したより悪いとする四九%という数字の背景には、直接的要因としては経済の再建のために連邦政府からの援助をもっと手厚く、そしてもっと迅速に行ってほしいと願う旧東独市民の苛立ちがあるが、もうひとつ間接的ながらなさか気になる要因として(そしてこの方が深刻なのだが)、むしろ統一後になって芽生えてきた旧東西両市民の相互不信があると思われる。「統一して初めて東西ドイツ人はもともとどんなに違いかということが明らかになった」という意見をどう思うかという質問に対して、旧西独市民の六九%、旧東独市民の七七%がそれを肯定した。統一前には歴史的文化的同質性・連続性に見目が向けられ、まるで無理やり引き裂かれた恋人同士のように互いに相手に懂れていたのが、実際に一緒になってみると今度はお互いの欠点ばかりが目につ

き、双方の違いばかりが意識されるようになったかのようである。そして同じアンケートのプラス五からマイナス五までの目盛をつけた他国民に対する好感度調査において、旧西独市民に対する好感度は、統一が達成されたばかりの昨年の秋の同じ調査に比べ、プラス二・〇からプラス一・一に下がり、プラス二・〇のフランス人、プラス一・九のアメリカー人より低く(同胞民族であるにもかかわらず)、プラス一・二のロシア人並み(ゴルビー人気のおかげで)というショッキングな結果が出た。他方、旧東独市民における旧西独市民に対する好感度も、昨年の秋のプラス二・七からプラス一・七に急激かつ大幅に下落した。旧東西両市民の意識の間には明らかに亀裂が生じている。西の市民(West)と言われる)たちにとって、いわゆる統一のコストの負担とそのために払う犠牲がたとえば増税という形で現実の生活を圧迫したことのほかに、東の市民(East)と言われる)たちの彼らから見ても自助努力を欠いた甘え、あるいは四十年にわたる社会主義体制の中で身体にしみついていたと彼らに見える怠惰が我慢ならぬものと思われるのであるらしい。実際、アンケートの「旧東独市民の多くは安直に考えていて、西並みの生活を望みながら、昔の東でのようにしか働こうとしない」という意見に対し、西市民の七三%が同感を表明している。西の市民の東の市民に対するイメージ調査でも「怠惰である」という特質の点で高

い偏差を示しているが、そのほか気になる特質として、「自立性がない」、「ローカルである」、「柔軟性に欠ける」が目につく。こうした東市民に対するマイナスイメージの形成に際して、個人の自由な活動を制限する社会主義という暗いイメージのほか、民主主義的市民社会の成熟の遅れた東欧というイメージ、さらにはおそらく、軍国主義と官僚主義の国プロイセンの古いイメージがひそかに働いているのではあるまいか。というのも旧東独地域はちょうど昔のプロイセン王国（ベルリンのあるブランデンブルグ州はその発祥の地）と地理的に——そして種族的にも——重なるからである。（プロイセン人はドイツではもともと人気がない。）

この深刻な対立、とは言わぬまでも齟齬軋轢、あるいは感情の行き違い、は東の市民の西市民観にもはつきりと表われている。このアンケートには自由意見欄が添えられていたが、東市民一〇〇〇人の回答者のうち六七五人がここに意見を寄せた中で、そのほぼ半数が西市民の傲慢さを批判していたと言い、「まるで占領軍のようだ」、「自分を勝者だと思っている」、「我々を馬鹿扱いする」、「我々を侮っている」といった忿懣の声が紹介されている。だが我々はむしろここに東市民のコンプレックスの顕われを見てとるべきだろう。この東市民の鬱屈した心理を『シュピーゲル』六月十日号で理解をもつて解説しているのは、あの体制崩

壊のさ中、四十一歳の若さで社会主義統一党（まもなく民主社会主義党と改名）の党首に推されたユダヤ系のインテリ弁護士グレゴール・ギージである。彼は「東西ドイツの人間がいまだにお互いに疎遠であるのはどこに原因があるのか。思考および行動様式の相違は殆ど元のままで、相互の無理解と誤解はむしろ増大している」という憂慮にみちた書き出しから始めて、東市民の不満と不安を次のように分析する。まず直接的な不満の要因として挙げられているのは、これまでいかにお金（東マルク）を持っていたても慢性的な品不足のために手に入らなかったものが、突然溢れるばかりにショーウィンドーに並び出したのに、今度はお金（西マルク）がないために買うことができないというフラストレーションである。金万能の社会の中で貧乏人が味わう悲哀と言えようか。だがそれにもまして彼らの心を苛立たせ、とまどいと不安を掻き立てているのは、ギージによれば、社会体制の転換に伴う急激な生活の変化と、それが要求する意識変革にスムーズに適応する自信のもてぬことである。自由競争社会の中に突然放り出されて、生き残っていくことができるのかという不安である。旧体制下にあつては自由は制限されていたが、そのかわり保障があつた。己れの将来は見はるかしうるものであつたが、そのかわり安心があつた。旧体制は徹底してステイタックな社会であつた。それは息苦しい半ば死んだ社会と言えるかもしれ

れないが、今度はダイナミックとはいえ、いやそうであるがゆえ安定を保障されぬ、流動的で不透明な社会になったのだ。自由と可能性を手に入れたかわりに、危険に満ち満ちた無定形な世界の中で、己れの力ひとつを頼りに生きてゆかねばならなくなった。(西にもそれなりの社会保障制度はあるにしても。)これまでの社会はその構成・存立原理が一元的で、それゆえにたいいていのものが予測可能だった。情報ひとつとっても、旧社会では政府によって完全にコントロールされた情報は国民にとって真偽の判定がたやすかった、とギージは言う。それが今では種々雑多な情報の洪水の中で各人は自分の判断に基づいて取捨選択し、自分の責任で行動しなければならぬ。流動的で不透明な現実に自分で立ち向かわねばならない。またギージは、旧社会は行動半径の狭い、移動の制限されたいわば閉鎖的な社会であつたので犯罪の発生率も低かつた。とついでに指摘している。喩えて言えば、閉鎖的ではあつても比較的均質で安定した静的な社会である農村から、いきなり生き馬の目を抜く大都会に放り出されて呆然としているおのぼりさん、あるいは、親の保護とその引き換えの管理と統制のもとにあつたのが、ある日突然独立を申し渡されて途方に暮れている青年——東の市民たちはそんな姿に似ていると言えるかもしれない。いや、だがそんなふうに言う東の市民の真の苦悩を戯画化し矮小化したことになりはしないか。彼

らはなんといつてもこの自由を自分で勝ち取つたのであつたし(整然たる大デモンストレーションと断乎たる意志表示による歴史上まれな誇るべき無血革命)、早期統一にしても、一部で揶揄を混じえて言われるようにC D U (現政府与党) がばらまいたバナナとボールペンにつられてのことだった、などと決して信じるこのできぬ、彼らの現実感覚と歴史的判断に基づく選択だったにちがいないのだから。旧東独市民が事実上の吸収合併であつた即時統一を拒ぶことによってゆるやかな国家連合とまったく新しい型の社会主義の模索の道を自ら塞いでしまつたのは、彼らが体験した社会主義への幻滅もさることながら、体制崩壊後の広がる混乱と無秩序の中で、理想に向つての予測不可能な実験よりも一日も早い秩序の回復を願う気持ちから、目の前に提示された確実な現実の方を択ぶほかなかつたのだと思われる。彼らの最大の苦悩はおそらくアイデンティティーの喪失であろう。たしかに西ドイツとの統一は歴史的アイデンティティーの回復であつた筈だが、統一が果された今、D D R市民としての自分たちの四十年間は一体何だったのか、もしそれが虚妄だったとすれば取り返しのつかぬ時間——とそして己れ——を失つたことになる。ギージが言うように、旧東独では国家と共同体への奉仕を強制されたかわりに、社会に必要とされる人間として己れの価値を意識することができたのに、新しい社会ではまるで役立たずの

厄介者か無用者、「望まれぬ親戚」(ギージの寄稿記事のタイトル)の扱いではないか。こうした思いが彼らの胸をさいないでいるのにちがいない。

世界的規模での雪崩をうっての社会主義の放棄と自由化。だがこれでもって一切の社会主義の理念の無効性と資本主義の原理の正しさが証明されたとするのは早計に過ぎよう。たしかに計画経済の失敗は人間の不完全さの証明にほかならなかった。また計画経済が人間の自主性・自発性の芽を摘み取る抑圧的側面をもっていたことも確かだ。それに比べ市場原理は、もしそれが正常に、理想的に機能する場合、たえずこれを他者の評価と批判に晒すという点で、硬直化や独善の弊害を防ぎ社会を活性化する。だがこの市場原理が自由競争という名のもとに弱肉強食のイデオロギーを正当化する論理として歪曲される場合——社会主義の挫折によってそのような風潮が強まっているように見受けられるのだが——、それは真実を見誤るものとなる。生物界に見られる弱肉強食の原理は決して真理のすべてではなく、むしろそれは真理の一部、表層の真理にすぎないのであって、仔細に観察すればむしろ平衡と調和の原理こそがより深い、より根本的な真理として働いていることは、今日では誰も知るところだからである。環境やエネルギーといった地球規模で緊急に対処すべき問題に迫られている今、時代はむしろ資本主義か社会主義かではなく、A・ト

ラーの言う産業主義をいかに克服していくか、ポスト・モダンの文明に現代世界をいかに軟着陸させるか、を真剣に考えねばならぬところまで来ているのだ、と筆者は思う。そのような状況下であって、しばしば懸念される統一によるドイツの強大化ということも、そもそも近代国家が過去の遺物となりつつある産業主義の産物なのであってみれば、もしかすると古い国家観の生み出した幻影にすぎぬかもしれない。むしろボーダレスと言われる時代を迎えつつあることを思えば、たとえ一時的には独仏枢軸で推進してきたE.C.統合に微妙な影を落とすことはあっても、そして首都がボンからベルリンに遷ることによって増した地理的距離の分だけ心理的・政治的に一時期パリとの間に疎隔が生じようと、ヨーロッパの中央に位置するドイツの統一は、むしろ新たにヨーロッパの仲間入りをしようとしている東欧と、そして旧くからのヨーロッパである西欧とを結びつける触媒の働きをするのではあるまいか。ドイツの統一がヨーロッパ統合の原動力となること(ペーター・ペンダー)、それがすべての人々の願いであり、少なくともそのような願いからドイツ連邦議会は東欧に近いベルリンを首都に択んだのだと筆者は信じたい。

(大学経済学部教授)

一口三十回のすすめ

―だ液による活性酸素消去の研究から―

西岡 一

1、有効なガン予防法はないか

現代人にとってガンは最も恐るべき病気である。

わが国では一九八一年に死因の第一位となり、現在、年間二十一万人以上が、一日では約五八〇人がその犠牲となっている。誰もが「アレだけは仕様が、できることはただ一つ」とガン保険に入っている。

ガンの原因の多くは、環境の発ガン物質であることは、すでによく知られた事実である。特に、日常的に体に摂取される食品と重要な関係があることが、世界の多くの専門家によって指摘されており、私もそう思っている。

私はこれまで約二十年にわたり、環境発ガン物質に関する

研究を続けてきた。物質の発ガン性をバクテリアを用いて簡単に判別する方法を開発して、いくつもの新しい発ガン物質を見いだしたりもした。

二十年前にこの研究を開始したときは、こうして環境から発ガン物質を見つけては、取り除いてさえ行けば、ガンは今世紀中に撲滅できると信じていた。この分野の他の科学者たちもそう考えていたに違いない。

しかし、この見通しは甘かったといわざるを得ない。現在、ガンはなお増加傾向を示し、二十一世紀には年間三十三万人が犠牲になるだろうと見積られている。

それにしても何か有効な予防法がないものだろうか。

2、だ液の研究が開始された

十数年前、私の研究室でだ液の研究を開始した。

当時、日常的な食品から次々と発ガン物質やその疑惑物質が見いだされ、大きな社会不安ともなっていた。食品添加物の殺菌剤AF-2、カビ毒のアフラトキシン、魚などの焼け焦げから取り出されたトリプP-1やグルP-1などの発ガン性が指摘され、マスコミが報じて、誰もがおびえる状態であった。

こんな時、これらの人間への危険度を正しく評価するための手段として、これらの毒物をだ液と反応させると、その毒性はどう変わるかを知らたいと思った。食べ物はず口から入るからである。

毒性の目印は、発ガン性と密接な関係がある変異原性である。変異原性とは、細胞の遺伝子DNAを損傷して、突然変異を起こさせる性質である。実験方法は簡単である。試験管の中で、これらの発ガン物質とだ液を反応させてからバクテリアに作用させて、突然変異細胞の出方の違いを調べるのである。

最初の実験が、アフラトキシンで行われた。その結果、この毒物の強い変異原性は、だ液と混ぜるだけで殆ど消えていたのである。私たちはこの結果に勇気を得て、次々に

毒物とだ液を混ぜる実験に取り掛かった。

その結果、判明したことは、これまでによく知られた天然の、あるいは合成された発ガン物質の毒性に対して、だ液は相当の毒消し力を示すことであつた。

3、毒消し劇の主役は

直ちに国内の学会に発表し、大きな反響を得た。

一九八〇年には国際的な専門誌「Mutation Research」に、「Human saliva inactivates mutagenicity of carcinogens」(ヒトだ液は発ガン物質の変異原性を消去する)という論文を発表したが、この論文に対して、世界中から数多くの別刷の請求があつた。

私たちは以来、この毒消しのメカニズムの研究を行ってきた。だ液を、加熱、希釈、pH、ろ過などの処理をして、毒消しの効果を調べた結果、このメカニズムには酵素反応が絡んでいることを推定した。

だ液には消化酵素など多くの酵素が含まれているが、それらを一つずつ調べて、ついに突き止めたのが、酸化酵素であるペルオキシダーゼである。

ペルオキシダーゼそのものを各種の発ガン物質に作用させると、それらの変異原性は確実に低下した。毒消しのメカニズムの主要部分は、この反応であることはほぼ疑いの

余地がなくなった。

ペルオキシダーゼは本来、活性酸素を消去する酵素である。そして活性酸素は、私たちの健康のあらゆる所で重大な悪影響をもたらすものとして、現在、極めて注目されている。特に、ガン、動脈硬化、糖尿病、心臓病などに、それに老化にも密接に関係することが判明している。

4、活性酸素は悪役だ

活性酸素には、 O_2^- 、 H_2O_2 、 $-OH$ などがあるが、その他にも過酸化脂質などもその一種で、私たちの生体内で常時、普遍的に生成している。

これらは酸素分子と水分子との間で、不安定な状態で存在し、時になだれ現象を起こして多量生成する。また反応性に富み、例えば細胞のDNAに一重鎖切断などの損傷を与え、突然変異や発ガンのきっかけをつくる。

ただし生体細胞には、これらを効率よく消去する頼もしい酵素たちがいる。カタラーゼ、SOD（スーパーオキシドディスムターゼ）、そしてペルオキシダーゼもその一つである。

私たちの研究室では、遺伝子工学の手法を用いて、活性酸素消去系の酵素が遺伝的に生産できない大腸菌の各種変異株を作製した。これらを活用することによって、あらゆ

る物質について活性酸素を生成するかどうかを調べたり、また逆に活性酸素を消去する働きがあるかどうかを調べることができる。

こうして開発した試験法（“Kattisodアッセイ”と呼んでいる）で調べてみると、発ガンのきっかけをつくるイニシエーターといわれる多くの発ガン物質は、実は活性酸素生成物質であることを見いだした。

さらに発ガン促進物質として知られる多数のプロモーターもまた活性酸素を生成していた。だから、これら各種の活性酸素をいかに消去するかが、ガン予防の決め手になる可能性が高いことが予想された。

5、活性酸素を消去する

私たちのこの試験法を用いて、AF-2やトリップー1など、食品に関係があるさまざまな発ガン物質もまた、活性酸素生成物質であることを突き止めた。

だから、だ液の毒消し作用とは、つまるところ、だ液に含まれるペルオキシダーゼが、発ガン物質から生成する活性酸素を消去する働きだということになる。そして、よく嚙んで食べれば、だ液が活性酸素を消去し、ガン予防につながるという論理が成立する。

これまでに四〇〇人以上の人々から、だ液の提供を受け、

各種の発ガン物質に対する毒消し力を調べた。提供者の多くは、本学の学生である。その結果、毒消し力には明らかに個人差があった。毒消し力の強い人と弱い人がいるのである。

またペルオキシダーゼのレベルを簡単に測定する方法を考案し、提供された液のそのレベルを同時に測定した。

そしてだ液の毒消し力の強さは、そのペルオキシダーゼのレベルと、ほぼ完全に相関していた。ペルオキシダーゼのレベルが高い人は毒消し力が強く、低い人は毒消し力も弱い。つまり、活性酸素消去力の差で、発ガン物質の影響の受け方が異なると考えることができる。

だ液のペルオキシダーゼのレベルの高さによって、提供者を、A、B、C、D、Eの五段階に分類した。Aは極めて強いだ液の、B、C、Dとだんだん弱くなり、Eは極端に弱いだ液の持ち主である。

いつもはAの優秀なだ液の持ち主でも、極端に疲労した時などには、このレベルが低下し、活性酸素の影響を受け易いことも分かった。Aのだ液の学生に、御所一周のマラソンを繰り返してもらうと、疲労と共に確実にペルオキシダーゼのレベルが低下したのである。

男女では差は無かったが、年齢には関係があった。一般的に、やはり高齢者ほどペルオキシダーゼのレベルは落ちるようである。家族的背景についても研究し、興味ある結

果を得た。

いろいろな食物について、その活性酸素の消去力を調べてみると、やはり古くから健康によいといわれているもの、例えばニンニクや朝鮮人参などは強いようである。現在、多数の提供者からの母乳について、その活性酸素消去力を研究中である。

6、「一口三十回の会」 会員募集中

一九九〇年十一月二十四日、日本咀嚼学会が設立された。その目的は人間の咀嚼という行為の持つ意味を科学的に位置づけ、一次健康科学に寄与しようというものである。

当然のことながら、極めて学際的な色彩が強い分野である。この学会への参加者は、歯科学をはじめ、医学、小児科学、栄養学、調理科学、生化学、霊長類学、ロボット工学、化学工学、文化人類学など幅広い分野の研究者である。私も発起人の一人として、当日の総会で、「咀嚼とガン予防」と題して、私たちの研究で得た結果を基にして講演した。

また一九九一年四月、京都で日本医学総会が開催され、全国から多数の医学者が参集された。ここで私は「活性酸素消去系とガン予防」について講演し、多くの方々から興味をいただいた。

私はガン予防は、結局、活性酸素の消去にかかっているという「活性酸素消去説」を唱えている。最も簡単な活性酸素の消去法は、だ液の活用であろう。

私は「一口三十回の会」を設立した。現在、会員募集中である。会費は無料。誰でもすぐそのその場で入会できる。会則はただ一つ、「一口食べ物を入れたら、三十回は噛もう」、それだけである。活性酸素を噛み消すわけである。三十回には科学的根拠がある。活性酸素を消去し、毒消しするのに30秒かかる。1秒に一回として三十回というわけである。

最近、「かむ長寿学・一口三十回の会会員募集中」という本も出版した。

昔から人は食べ物をよく噛んできた。噛みごたえのある食物が多かったからである。現在は噛みごたえのない白米や柔かく製造された加工食品などが常食され、誰もが噛むことを忘れたようである。この会の会員が増えれば、ガンや成人病が減り、老化もスローダウンして、健康で明るい社会が期待できるのではないだろうか。何しろ金がかからない。一つやってみる価値があるのではないだろうか。

同志社の皆さんにも、この際、ぜひご入会をおすすめしたい。

7、「先生！よく噛んでますか？」

私は数年前から本学で「環境と健康の科学」という講義を開講してきた。ここでは私の研究分野を中心に、環境と健康に関するあらゆるテーマを取り上げる。

ようやく最近になって、環境問題は21世紀にかけて、人類の最大の課題であることの認識が高まってきた。そのためでもあろう、毎年、受講生が多く、教務課やその他で迷惑をおかけしているが、この機会にお詫びをしておきたい。

中には他大学の学生や主婦らしき人もいる。受講生に受講の理由を尋ねると、意外に多いのが「母親に勧められた」である。また「この講義を聴くとガンにならないという噂があるので」もある。そんな学生には「試験で80点以上とればね」ということにしている。

講義は毎回異なるテーマで、一回完結のテレビの水戸黄門式である。テーマには、例えば、「発ガン物質とは何か」「食品添加物はなぜ問題か」「放射線はなぜ怖いのか」「化粧品を解剖する」「現代人とエイズ」などがある。

そして一年を締めくくる最後の講義は、「ガン予防法を探る」である。ここで、私たちの見いだしただ液の働きとそのメカニズムについて説明する。そして、よく噛んで食べ

れば、ガン予防につながり、健康で若さが保てる可能性の高いことを説く。

一年間の講義で、私から環境の有害物質などについて、皆さん聞かされ、「先生の話を聞いていたら、食べるものが無くなります」と悲観的になってきた学生たちは、ここ

でほととずる。中には拍手してくれる学生もいる。

少し困ることがある。私が明徳館の食堂で食事をしていると、学生たちが私を見る。そしてこういふのである。「先生！よく噛んでますか？」
(大学工学部教授)

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄満の啓明館(旧図書館)、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴染みしんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しました。

従来から同志社の絵葉書は写真・絵・版画などで発行されていますが主に記念品としてのものが多く、今回は趣きをかえて学校・建物などをまとめ、広く使われるものをと、校友秋山真邦・宇佐美宏両氏に撮影制作を依頼、その出来栄えは多くの方々から賞賛の言葉を受けています。

購入ご希望の方は、直接電話または文書でお申込みください。

なお代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

〈内 容〉

- ◎重要建築物
- ◎新島襄の面影
- ◎大学今出川校地
- ◎大学田辺校地
- ◎女子大学今出川校地
- ◎女子大学田辺校地
- 定価各組とも
- 六枚一組二百五十円
- (送料七十二円)

発行所 同志社収益事業課

電話 (〇七五)―二五一―三〇三七・八

